

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	学会認定・臨床輸血看護師が輸血医療にもたらずもの (特別講演, 第36回福島県輸血懇話会抄録)
Author(s)	河野, 武弘
Citation	福島医学雑誌. 73(3): 87-88
Issue Date	2023
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/2256
Rights	© 2023 福島医学会
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-06-30T15:51:48Z

スタッフ全員が共有し活用できるように、院内研修を行い院内での連絡体制の整備と教育を行った。

<特別企画>

貧血と輸血について

福島県立医科大学 医学部

輸血・移植免疫学講座

池田 和彦

WHO 基準（ヘモグロビン濃度：成人男性<13 g/dL, 成人女性<12 g/dL, 等）に合致する貧血は日本人の約 10% に認められる。貧血の原因として鉄欠乏性貧血が最多で、慢性腎臓病（CKD）による腎性貧血がそれに次ぎ、他にも多彩な原因がある（*Lancet Haematol.* 2023. DOI: 10.1016/S2352-3026(23) 00160-6）。貧血は心不全、CKD、周産期など、様々な病態の転帰を悪化させる。一方、貧血に対する赤血球輸血の安全性は高まったが、非制限的（liberal）な輸血は利点が乏しく、むしろ予後を悪化させることも多いため、ほとんどの臨床的状況で制限的（restrictive）な輸血が推奨される（*JAMA.* 2016; 316: 2025）。最近、貧血の治療が急速に進歩し、病態の改善や赤血球輸血の必要性軽減が期待されている。

内科的には、最近わが国でも使用可能となった高用量静注鉄剤が鉄欠乏を伴う心不全患者の入院・心臓死を減少させ（*Lancet.* 2020; 396: 1895, *Lancet.* 2022; 400: 2199）、妊婦の貧血と倦怠感を改善させた（*Arch Gynecol Obstet.* 2023; 308: 1165）。腎性貧血に対しては、経口の HIF-PH（低酸素誘導因子プロリン水酸化酵素）阻害薬が発売され、治療選択肢が増えた。血液疾患に対しては、GDF-11（成長分化因子-11）阻害薬が骨髄異形成症候群に対する赤血球輸血依存を改善させることが示され（*Lancet.* 2023; 402: 373）、本邦でも承認申請中である。また、骨髄線維症では、鉄代謝の調節に重要なホルモン、ヘプシジンが亢進しており、これを阻害する薬剤が赤血球輸血依存を改善させる（Ikeda and Ueda, *Lancet.* 2023; 401: 248）。

周術期における輸血量の増加は手術成績を悪化させるため、造血の適正化、出血・凝固異常の最小化、術後貧血管理の最適化を柱とする patient blood management が必要である（*Blood Transfus.* 2015; 13: 370）。造血の適正化として、待機的手術では術前 4 週間までにスクリーニングを行い、治療可能な貧血

があれば手術までに対処しておくべきことが提言されている（*Blood.* 2020; 136: 814）。例えば、鉄欠乏性貧血に対する高用量静注鉄剤静脈投与は輸血量を減少させる（*BMC Geriatr.* 2022; 22: 293）。一方、出血・凝固異常の最小化を目的として、周術期に抗線溶薬のトラネキサム酸を使用する報告が増えている。最近、鉄欠乏性貧血を伴う患者への準緊急手術（受傷後 48 時間以内の大腿骨骨折）においても、高用量静注鉄剤とトラネキサム酸の併用によって、輸血量が減少することが報告された [“HiFIT trial” in *Lancet Haematol.* 2023. (invited linked comment by Ikeda and Nollet, *Lancet Haematol.* 2023. DOI: 10.1016/S2352-3026(23) 00214-4)]。

貧血に対する様々な治療法が増え、その改善が予後の改善や赤血球輸血量の減少に繋がることから、貧血診療の重要性は高まっている。

<特別講演>

学会認定・臨床輸血看護師が輸血医療にもたらすもの

大阪医科薬科大学病院 輸血室

河野 武弘

【はじめに】

輸血は臓器移植と同様の医療行為であり、免疫学的機序や病原体伝播などによる有害事象を起こしうることから、その実施にあたっては安全なプロセス管理と患者への特段の注意を払う必要がある。輸血実施時に患者に最も近い存在である看護師の役割は大きく、輸血に関する深い知識と的確な判断能力が要求される。日本輸血・細胞治療学会は、日本血液学会、日本外科学会、日本産婦人科学会、日本麻酔科学会の協力、および日本看護協会の推薦を得て、学会認定・臨床輸血看護師制度協議会を発足させ、2010年に本制度を導入した。本制度は、輸血に関する正しい知識と的確な輸血看護により、輸血の安全性の向上に寄与することのできる看護師の育成を目的としている。2022年度末で2,217名が学会認定・臨床輸血看護師（以下、輸血看護師）の認定を受け、全国の施設で輸血医療の一翼を担っている。

【学会認定・臨床輸血看護師の活動】

輸血看護師は、熟練した看護技術を用いて水準の高い輸血看護を自ら実践するだけに留まらず、輸血看護の実践を通して看護職に対する指導を行い、他職種と協働して安全で適正な輸血医療を提供するこ

とが期待されている。「輸血チーム医療に関する指針（日本輸血・細胞治療学会）」は輸血看護師に対して、輸血療法委員会や医療安全対策委員会などに参加し、ベッドサイドにおける輸血医療の安全性を確保するための体制作りを行うことや、院内各部門における輸血教育への支援を行うことを求めており、各施設の輸血看護師は自施設の現状に応じた活動を繰り広げている。輸血看護師の学会活動は年々活性化しており、日本輸血・細胞治療学会学術総会においては、2012～2023年に185題の一般演題が看護師によって発表された。制度導入後13年目を迎え、輸血看護師の活動は、自施設内から地域医療へと幅を広げている。2023年8月現在、71名の輸血看護師が輸血機能評価認定制度（I&A制度）の視察員資格を取得し、他施設の輸血実施体制の評価と安全性の保証に携わっている。また、各都道府県の合同輸血療法委員会においては、近年その多くで看護師のワーキンググループや専門部会が設置されており、輸血看護師がその活動の中心となっている。毎年全国の合同輸血療法委員会から公募採択される「血液製剤使用適正化方策調査研究事業」においても、輸血看護師の取り組みが数多く報告されている。

【大阪医科薬科大学病院における学会認定・臨床輸血看護師チームの活動】

大阪医科薬科大学病院では、18名の看護師が輸血看護師の認定を取得し、輸血実施頻度の高い院内各部署に勤務している。各看護師は、自部署において高水準の輸血看護の実践や看護職への指導を行うのみならず、部署の枠を越えた輸血看護師チームを形成し、輸血責任医師のリーダーシップのもと、院内輸血部門と協働して輸血医療の安全と質の向上に取り組んでいる。同チームは毎月定例会を開催し、最新の輸血関連情報や院内各部署の現状について輸血部門と情報共有を行い、院内輸血医療の質の均てん化を図っている。インシデントやヒヤリハット事例の発生時には、輸血看護師が速やかに現場でのヒアリングを行なって問題点を把握し、輸血部門と連

携して再発防止策を検討している。看護師教育については、新人看護師からジェネラリスト看護師までの幅広い層に対する集合研修（院内全体あるいは各病棟を対象としたOff-the-Job Training）、院内監査（On-the-Job Training）、そして院内イントラネットを用いたe-Learning等の教育プログラムを企画、実践し、更にプロフェッショナル看護師である輸血看護師の更なる育成に取り組んでいる。輸血看護師は、輸血実施プロセスにおける安全ルールを形骸化することなく院内文化として根付かせるため、各部署の輸血実施状況の把握から評価・改善に至るPDCAサイクルを回し、併せて想定外の新たな問題点に直面しても迅速に対応できるよう、輸血看護師間や輸血部門とのコミュニケーションを十分にとりながらサステナブルな活動を継続している。これまでに、救急医療における緊急大量輸血、小児輸血やCOVID-19患者への輸血実施などにおける安全性の向上に貢献し、その成果を学会で発表した。輸血看護師チームの院内横断的な会議への参加に関しては、代表者4名が輸血療法委員会に出席し、看護師長1名が病院看護部の部署責任者会議、看護副師長1名が副師長会議、そして看護主任4名が病棟主任会議に出席して、報告や情報共有を行なっている。また、チーム全体の活動内容として、年次活動計画および評価、定例会の議事録、そして学会発表内容などを病院看護部に随時報告している。

【さいごに】

輸血看護師は、施設の輸血医療チームにおける情報共有の要として、輸血部門と輸血実施現場の距離感や温度差を縮め、安全で適正な輸血実施に関する持続的かつ効率的な教育と情報の周知徹底に貢献している。施設内から地域医療に活動の幅を広げている輸血看護師に対しては、今後更に学会発表や論文執筆に取り組むことで、自身の活動や研究成果をわが国の輸血医療の共有財産として還元することが期待される。